書評

日本社会は今、変化しようとしている。歴史の連続性をおっかけていくとき見られる飛躍のチャンスがいろいろ転がっているという意味でだけではなく、日本人が日本社会を初めて相対的にとらえ、自分自身の手で変化させるという思想を伴った変化であると思われる。

そういう雰囲気を感じて伝えるのがここに紹介する二冊の本である。両者ともに読者に発想のきっかけを与えるために存在している。だから、すべてを言い切ったり、言い切ったつもりにならないようにして、歴史の変化の見つめかたをこれらの本の中にとどめてしまわないようにしている。歴史をみんなでよく考えて能動的に動かす思想を定着させるということがこれらの本の役目である。

この歴史の変化という言葉は、重々しいイメージを持つが、能動的姿勢を準備することにより手ごたえのある楽しいものに変えることができる。読者はひと事でしかなかった日本の戦後、あるいはそれよりも前の歴史を自分のものにして、これから先の見通しを決定していく快感を得ると思われる。

両者は日本社会に特徴的な天皇をキーワードにして論を展開する。タブーにこそそれを持つ社会の秘密を解く鍵があるわけだから、活用して下さいと待っているものをきちんと利用してあげて、いろんなものを可視化していくのである。その面白さを少しでも伝えられたら本書評は成功したといえよう。

「二千年」の方はここまで述べた歴史の変革に日本社会が何の準備もしていないじゃないかという危機意識を持つことから話が発生している。まず世界情勢はこうで、数年後にはこういうことがどこでどう行われるかという話題をずらずらっと並べ、そういう重要なことをなに一つとして現在の国民は関心を持っていないということに気付かせている。そしてその勢いで、その体質を歴史的に培ってきた天皇のシステムと、日本社会の双対性を明らかにする。ここから、本書の遊びも同時発生し、この勢いのまま天皇というシステムの起源を追って縄文時代の空想へと視点をさかもどさせる。空想とはいえ話には整合性があり、読者を楽しませると同時に歴史をぐっと近くに引き寄せる。

こうして今までなにもよく理解していなかった自分達の歴史を本当に自分達のものにしていくのである。そして根無し草であった自分達の歴史にある程度けじめを付けようとするのが本書のタイトルである「二千年の埋葬」であり、これからの歴史の変革の中へと足を踏み入れていく出発点を明らかにすることになるのである。

「冒険」の方は「二千年」より土俵は限定されているがしっかりとしたインパクトを与えるという意味では負けてはいない。こちらは日本の社会科学をほんものにするという大仕事への布石を敷く大事な役目を背負っている。それは自分達の社会を本当に解っていなければ始まらない。

まず準備として国と国民の契約である憲法の機能と意味を明確にし、日本国でそれがはたらいていないことを誰も問題にしていないことと天皇というシステムを結び付けていく。それと平行して、その無意識化されてしまった痕跡たる戦後日本社会のかげの部分のダイナミズムを、その泥どろとしたルサンチマンに見合うだけの明確なパースペクティブでもって明らかにしていくのである。

この歴史観を確立することによってのみ自分達の社会を理解することができ、社会科学を始めることができるのであり、立派な市民として生きることができるのである。このことは学問の世界にとどまらず、どんな世界にいても意味を持つと思われる。

以上ちょっとした紹介ではあったが、ほめすぎであればそれには目をつむって以下のことに注意を向けてもらいたい。つまりここで取り上げた本で発せられた問題はそのまま私たち日本人に向かって提示され続けているわけで、この事態をいかに処していくかにより、きたる事態を日本社会がいかに手ごたえよく乗り越えられるかが占われることになるということに。

（工学系院生　山田　義博）

闘論二千年の埋葬
日本人に何が起こっているか
田原総一郎・栗本慎一郎 著
NESCO　一、四五六円

冒険としての社会科学
橋爪大三郎 著
毎日新聞社　一、二六二円

◉日本人／意識　　にっぽん流行白書

平成の天皇論

崩御のあとのベクトル
天皇交替劇が象徴するもの

年号が平成に変わり，新天皇が即位した。「昭和」という重たい時代にとうとうピリオドが打たれたと安堵する反面，とらえどころのない時代の始まりに戸惑いをかくせぬ人も多い。

昭和は，最初の20年と残りの40年余で，ずいぶん印象がちがう。戦後教育の決まり文句では，終戦・イコール・「新生日本の夜明け」。「平和な民主国家」建設の槌音が響きましたと，まるで昭和20年から歴史が始まったと言わんばかりである。ところが，そうでもないことを気付かせる何ものかがある。それが，昭和天皇だった。何を考えているのか一般の国民にはほとんどわからないのだが，そのためかえって日本人の連続する無意識の部分を，彼は感じさせた。

戦前と戦後が一貫するひとつの時代であると，身をもって示しているのが昭和天皇である。かつては帝国憲法の主権者。新憲法下で「国民統合の象徴」となった彼は，退位することもなく，その時なりに自分のポジションを守った。それを背後で黙認するのが，戦前から戦後にかけての日本を，持続的な問題意識で眺めているアメリカである。

そういう遠方から眺めるなら，この60年間は，「昭和の大動員体制」とでもいうべきプロセスだった。人的・物的資源，宗教や思想や文学までもが，元の場所から掘りおこされ，配置し直され，効率的に再編成された。日本国内の土着の凹凸が，そうして根絶やしにされ，均されていった。人びとは数世代にわたって，それを耐え忍んだのである。

＊

平成の天皇は，昭和の責め苛む無意識を感じさせない。戦争責任と無縁の伸びやかさがある。だが同時に，自分のポジションを測りかねているような，当惑も感じられる。

終戦の年に，11歳。皇太子明仁は，もの心のついた時から，いずれ大日本帝国の頂点に立つと定められていた。しかし戦後は一転，家庭教師ヴァイニング夫人の，アメリカ流の教育を受ける。教科書に墨をぬった子供たちの，大人は信じがたいという思いを，彼も感じたはずだ。

旧カナ総ルビの「愛國少年文庫」や戦時絵本のたぐい（兄姉たちのお下がり）を，私は何回読んだことだろう。たとえば，隣りの畑から自分たちをついばみにやって来るニワトリたちに，決死の抵抗を試みるエンドウマメの兄弟を描いた「マメノコブタイ」。出来のいい作品でないのだが，言いようのない切迫感と高揚と，運命共同体の倫理のようなものを感じさせる。そういう質の緊張を，戦後の作品に探してもお目にかかれない。

昭和初年に幼・少年期を過ごし，昭和とともに成長した人びとが，自分たちの過去に黒々と墨をぬることをしたろうか。戦争の責任を具体的に感じてしまうほど，大きかったわけでもない。なにも分からないほど小さかったわけでもない。戦争の内側にいたとき，確かに世界はその時なりの価値と重みを持ち，切実な手応えで回転していた。それはどこへ行ったのか。すべて無だったのか。……言葉にならないこの世代のわだかまりは，黙して語らぬ上の世代と，屈託のない戦無世代とに挟まれて，行き場もなく埋もれている。

日本人の「思想」には，二度と騙されまい。というのもまた思想のはずなのだが，とにかくそう覚悟を決める。すると信じられるものは，飢えと欠乏の感覚だけだ。とにかく生きて，なにが悪い。人並みに暮らして，なにが悪い。そう自分に言い聞かせて，戦後の復興を，高度成長を，そして二度のオイル・ショックを乗り切ってきた。気がつけば，もう最初の動機は十分すぎるほど満たされてしまい，しかもそれに代わるつぎのアイデアがなくて，みんな右往左往しているではないか。

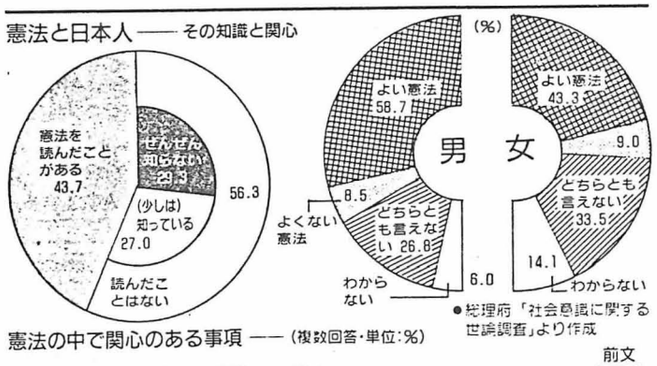
軍国主義の尊大から，敗戦国の卑屈へ。そして再び，経済大国の尊大へ。こういう振幅が昭和だったとすると，「平成」の先行きはいかにも危なっかしい。

＊

平成の天皇は，国民に「皆さん」と呼びかけ，「憲法を守る」と誓った。そう，その調子。そういう率直な語り口で，日本の新しい時代を内外にはっきり明らかにできる思想が，ほんとうにいま必要になったのだ。……ということに気付いている日本人の割合は，まだ少なすぎる。スタイルはよいが，なかみはこれから。言い訳さえすればすんでいた，いじけた昭和から，言い訳をしないで，しかも尊大にならない闊達な平成へ。そううまくバトンタッチできればいいのだが，目標を見失った日本人は，明日のビジョンすら描けないでいる。そういう日本人のつかみどころのなさを，平成の天皇への交替劇は象徴してくれているようだ。

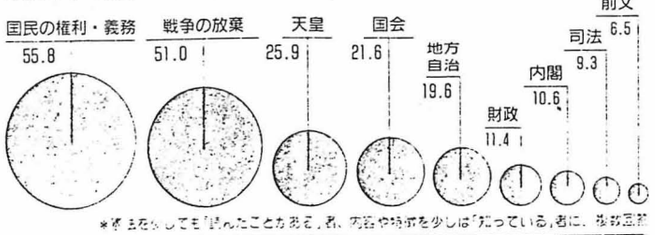
（橋爪大三郎）

憲法と日本人――その知識と関心



●総理府「社会意識に関する世論調査」より作成

憲法の中で関心のある事項――（複数回答・単位：%）



＊憲法を知っても「読んだことがある」者、内容や時代を少しは「知っている」者に、複数回答

1989-26　1/1